The Society of Naval Architects of Japan

講　演

華府會議に於ける軍備制限問題の經緯

正員　工學士　田　路　坦君

會長閣下並に諸君、是から會長の御依賴に依りまして華盛頓會議に於ける軍備制限問題のことに付きまして御話申上げることは甚だ光榮とする所であります、唯問題の性質と致しまして御承知の如く色々議會其他に於てもやかましい問題になつて居りましたものですから、本席で申上げますことは一般の政策若くは一般の外交政策に關しますことは避けて御話いたしたいと思つて居ります、又是から申上げますことはここに書いてあります通り正員田路坦の意見で、私が個人として諸君に御話し、又個人の意見を述べて居るものであつて、海軍委員としての私の意見でない事と御聽取を願ひたいと思つて居ります。

それで先づ此御話を申上げます前に華府會議の開かれる前に於て特に亞米利加の一般の空氣はどう云ふ風な狀況であつたらうかと云ふことを申上げて置く必要があるだらうと思ひます、又同時に日本に於ける此會議に對する一般の輿論若くは考がどうであつたかと云ふことも申上げなくてはならないのでありますが、是は私よりも諸君の方が詳しいことだらうと思ひますから、玆に申上げることは此會議前に於ける亞米利加の一般のアトモスフイヤーがどんな風な狀況であつたかと云ふことを簡單に申上げて置きたいと思つて居ります、それで順序と致しまして、私共が日本を立つて參りましたのは十月二日のコレヤ丸でありましたが、當初色々研究をしながら、又色々考へる所もありましてホノルルへ參りましたが、ホノルルは御承知の如く亞米利加大陸を距ること大分遠い所でありますから、當時に於てホノルルに於ては亞米利加の會議に對する一般の考其他はどう云ふものであるかと云ふことは殆ど知ることが出來ませぬ、それで桑港へ着いて見ますと、ここに初めて御承知の通り亞米利加大陸の第一歩を踏むことになるのでありますが、此處に來て見ますと此會議に對して亞米利加政府が如何に注意深く、如何に我々一行に對して出來るだけの處置を執つたかと云ふことが能く分かることになります、それは御承知の如く桑港は排日の巢窟でありますから、何か間違があつてはならぬと云ふやうな考から、特に我々一人一人に對して刑事巡査が一名乃至二名づつ必ず附きまして

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

どこへ歩るくにもそんな風に非常に嚴重な警戒をされたのであります、長い間桑港に居りました人の話では、何十年來無いやうな警戒であると云ふやうな話であつたのであります、それで當時亞米利加に在住して居りました日本人の多くの者は此會議に對して非常に多くの期待を持つて居つたやうであります、其例としましては、我々一行が汽車に乘りまして華盛頓へ進んで行く途中、汽車が停まります時には、必ず在留日本人が多くの數集つて居ました、又或所では代表者が居つて色々歡迎の辭を述べる人もあり、色々希望を述べる人もあると云ふやうな工合で、亞米利加大陸に居つた日本人は寧ろ我々が日本を立つて來た當時の日本の人よりも尙ほ一層痛切に考へて居つたやうにも思はれたやうな次第であります、華盛頓へ着きますと國務省からは特に儀仗兵を一大隊附けましたそれは「ポートメーヤー」から選拔されました儀仗兵に樂隊を附けまして、自働車の列を作つて儀仗兵が先立つてホテルに吾々を送り屆けると云ふやうな工合で、デモクラチツクと言はれて居る亞米利加が何處に於ても非常にミリタリツクで、我々が日本に於ても見られないやうな圖を反て多く見せられました、華盛頓へ着いて見まして初めて此會議に對して亞米利加人がどんな風な考を持つて居つたかと云ふことが非常によく分つて參りました、一番能く活動して居つたのは基督敎に屬する敎會の人々で、是等は敎會を開放いたしまして、彼等の理想として居る完全なる軍備、撤廢——、コムプリート・デイスアーマメント、是等は人道上に立脚して居るものであつて、之に對して色々パンフレツドを作りまして、どうかしてコムプリート・デイスアーマメントと云ふものをやりたい、それが出來なければフアースト・ステツプとして軍備の制限——リミテーションを行ひたいと云ふやうな考で、同時に方々の敎會では必ずコムプリート・デイスアーマメント若くは戰爭が無くなるやうにと云ふやうな風の御祈りをやつて居ると云ふやうな工合で、又敎會から出る色々なパンフレツドの中には各國の軍艦の全體の勢力の割合とか若くは金がどの位掛かるとか又は財力がどの位と云ふやうな色々な會議の進捗に伴つて必要であるやうなデーターを書並べまして、それを會員に配つて御互に研究すると云ふやうに、御互に熱心にやつて居つた次第であります、又同時にビジネスをやつて居る實業家若くはフアーマーのトラステーがありますが、是等は矢張り色々の書物を出したり小さな本を拵へたりして、ビジネスメンは軍艦を造ることは廢めても我々に影響は無い、我々は立派にやつて行ける、或は鐵屋さんは全體の船を無くしても亞米利加の全體の鐵の二パーセントにしかならぬと云ふやうなことを書立てまして、さうして出來るだけ此會議を成功さしたいと云ふやうな風の、比較的眞面目な考を持つて居つたのであります

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

又同時に此會議に對して期待して居りましたのはカラード・ピープル——即黑人、黑人は此前の巴里の會議以來、人種差別撤廢問題其他が出て居りました結果、成るべく日本人が此機會を利用して人種差別撤廢問題を出して貰ひたい、それから又御承知の如く亞米利加に於ては黑人は非常に惡く取扱はれて居ります、教育も不十分である、社會上の地位も認められない、又私刑——リンチの如きも行はれて居る、こんな風で、黑人が此會議を利用してどんな風にかやつて行きたいと云ふやうに、各方面から御互に研究して居つたやうであります、又學校に於きましては、兎に角コレッヂと名の付く學校の學生は、色々研究の討論會を開きまして、コンファレンス・オブ・リミテーション・オン・アーマメント、と云ふ題で討論いたします——又段々會議の進展して行くに隨つて色々の問題を學生がディスカッスして行かうと云ふ方法を執つて居りました、一方に於きましては、例の Bywater の Sea Power on the Pacific や Must we fight Japan? などが度々引合ひに出され、又討論をして居るのも度々聽きました、其他 A.B.C. of Conference と云ふやうな題で自問自答し、例へば日本の政策は侵略的ではないか、或は支那問題をどうすると云ふやうな色々なサブヂェクトを捉まへて、それを簡單に色々な人に分かるやうな小冊子を拵へて、方々にやつたり配つたりして居る、と云ふやうな狀況でありました斯う云ふやうに會議前に於ける亞米利加の一般の風潮と云ふものは、出來るだけ成功させたい、うまくやつて行かせたいと云ふやうに、非常に熱心に、非常に眞摯にやつて居つたと云ふことを我々は認めざるを得ないのであります、例へば當時に於て色々な政治雜誌、Outlook とか Atlantic Review と云ふやうな新聞雜誌に於ても、政治上の問題を捉まへて眞面目な討論をやつて居りました。

玆にちよつと御紹介して置きたいのは、御承知の方もあるだらうと思ひますが、當時サイエンテイフィック・アメリカンの海軍記者のミスター・ウオーカーがエージ・ファクターと云ふものを拵へまして、先づ各國の海軍力はこんな風な割合になつて居りはしないかと云ふことを發表しまして、是が大變專門家其他の方面にも兎に角贊成者が多かつたやうな次第であります、ちよつと簡單に行掛かり上申上げたいと思ひますが、其エージ・ファクターと云ふものは要するに船の生命と云ふものは約十五年である、言換へれば十五年經つた船と云ふものは迚も戰をすることが出來ない、十五年經てば殆ど戰鬪力が無くなる、それですから十五年と云ふものを艦齡としてエージ・ファクターと云ふものを作つた、それをここにちよつと書いて置きました(第一表參照)。亞米利加の船の例を取つて見るとメリーランドと云ふ船が千九百二十一年に完成して居る、コムプリートした時

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

UNITED STATES

BATTLE-SHIPS	DATE COMPLETED	DISPLACEMENT IN TONS	NO.IN CLASS	TOTAL DISPLT. OF CLASS	AGE	FACTOR	DISPLT. EFFICIENCY
MARYLAND	1921	32,600	1	32,600	0	15/15	32,600.
TENNESSEE	1921	32,300	2	64,600	0	15/15	64,600
IDAHO	1919	32,000	1	32,000	2	13/15	27,750
N.MEXICO	1918	32,000	1	32,000	3	12/15	25,600
MISSISSIPPI	1917	32,000	1	32,000	4	11/15	23,450
PENNSYLVANIA	1916	31,400	2	62,800	5	10/15	41,900
OKLAHOMA	1916	27,500	2	55,000	5	10/15	36,600
NEWYORK	1914	27,000	2	54,000	7	8/15	28,800
	TOTALS		12	365,200			281,500

Comparative strength in 1921. as
Modified by age. Ships carrying.
12—inch guns not included.

	Battleships	Battlecruisers	totals	Ratio
Unitedstates	281,500	nil	281,500	100%
Great Britain	302,050	110,000	412,050	146%
Japan	157,350	60,470	216,820	77%

に其船のエージはゼロ、其クラスが一隻あるさうですから其噸數が三萬二千六百噸、之にはファクターを十五分の十五と云ふものを掛ける、言換へればフル・ストレングスと云ふものを持つて居る、さうすると出來たばかりですから矢張り三萬二千六百噸、ところがニューメキシコになると、千九百十八年にコムプリートした、二十一年には船の年が三歳、さうすると十五分の十五から十五分の三引いたものしか船のストレングスが無い、三萬二千六百噸に十五分の十二を掛けたものしか無い、即ち二萬五千六百噸のファイティング・アクティヴィテーしか無い、とアッシユームしたのです、ニューヨークになりますと千九百二十一年には七年經つて二萬七千噸の船が二隻あるのですが七年經つて居るから十五分の八しか無いと見て、二萬九千八百噸とアッシュームします斯う云ふ風に艦齡に依つて其艦のファイティング・アクティヴィティーを決めた、是はあとで申しますヒューズの單に主力艦の勢力に依つて各國の海軍の軍備を制限しやうと云ふ案に較べて見れば比較的進歩した案だと思ひます、若し此案に依つて千九百二十一年に於て十五吋以上の大砲を持つて居る船に付て日英米三國の海軍の勢力を比較して見ると、私の勘定では亞米利加は戰艦が二十八萬一千五百噸、英吉利は四十一萬二千五十噸、日本は二十一萬六千八百廿噸、此方法に依れば亞米利加を百とすれば英吉利は百四十六パーセン

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

ト、即四割六分餘計に持つて居る、日本は七十七パーセント持つて居る、斯う云ふレシオが出て參ります、是は相當好い考と思ひまして、段々あとで御話して行く各國海軍の勢力比に關聯して參考の爲に一例として申上げて置きたいと思ふ。

そこで會議の始まる前にどう云ふことを豫想したか、是は私だけの考でありますが、私の豫想したのは、當時軍備制限と云ふことを非常にやかましく言つて居りましたが、而も制限を行ひますならば建造中の戰艦は廢めなくてはならぬ、其理由は亞米利加の船と云ふものは既に餘程前に船臺に乘つて居りますのに、此會議の千九百二十一年以後に於て各國海軍が毎年一隻づつ造らう、又は二隻づつ造らうと云ふ協定をしたとすると、亞米利加の海軍の船臺にある多くの船は六年乃至八年船臺に置かなくてはならぬ、是は殆ど出來ない相談、船がコムプリートするまでには八年も九年も經つてしまつて、十年前にデザインした船が八年九年後に出來ると云ふことは行はれない話である、言換へれば亞米利加が大きな制限をしやうと云ふならばどうしても新しい船を壞さなくてはならぬ、是は相當此問題を御研究になつたとしたならば同じ結論に達するだらうと私は信じて居ります、そこで會議の前に於きまして亞米利加が果して提案を爲すであらうか、又日本が先きに提案するだらうか、或は英吉利が出すだらうか、或はカードをやるやうなものですから、フェヤー・プレーで三人一緒に手を見せるか、是は各々得失があつて、其利害得失を考へて見ますと、先きに出したものはイニシヤティーヴを取ると云ふ利益がある、併ながら手の内を先きに見せなければならぬと云ふ不利益がある、又同時に出せば掛引をしなくてはならぬ、斯う云ふ御互に利害得失があるのであります、そこで會議が始まります前にどこが先きに手を見せるか、そこで三人してトランプをやつて居るやうに誰が先きに出すだらうかと云ふことは、要するに是はスペキュレーションの問題で、會議の前に誰にも考が付くものではない、又當時亞米利加はどう云ふ考を持つて居つたか、私が豫想したのは、亞米利加はどうしてもモンロー・ドクトリンの擴張をやるだらう、言ふまでもなくモンロー・ドクトリンなるものは既に平和會議の時分に於て破れたのであります、又亞米利加が歐洲に出兵した當時に於てモンロー主義は破れてをる、然らば亞米利加は果して全體の主義としてはモンロー・ドクトリンの擴張をやるであらう、それには亞米利加は一番のデフェンス、ラインを布哇に取るだらう、若くは南亞米利加の事柄は亞米利加が之を指揮するとか或は誘導するとか云ふやうな主義を執りはしないか、斯う豫想もして見ました、又其當時に於て色々考へて見ますと、新艦を壞はしただけではどうしても海軍全體に對するエキスペンスの節約が出來ない、古船を抱へて

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

新しい船を壞はしても仕方が無い、それでどうしても船のスクラッピングを行はなければならない、それはどの位やらなければならぬかと云ふと、自分が想像して見ますと全體の四割先づ此位の船のスクラッピングをやらなければならぬ、斯う考へたのであります。

それで丁度千九百二十一年の十一月の十一日、是は亞米利加で大戰に死にました、どこの人だか分らないアンノーン・ソールヂァーの大葬儀がありました、其翌日に初めて會議が開かれたのであります、唯會議の日には一般の今までの習慣として恐らく大統領のオープニング・セッションだけであらうと思つて行つて見たのでありますが、それが一番先きの日に亞米利加が、先き申した通りイニシャティーヴを取ると云ふやうに決めたものと見えて、皆さんの御承知のヒューズの提案と云ふものが出て來たのであります。

扨此問題に入るに先だちまして大體ヒューズの案と云ふものに付て一應申上げて置かなくてはならぬだらうと思ひます、ヒューズは第一日に於て海軍軍備の制限をする爲に四つの原則から成立つた一の案を提案した、其四つの案は是は皆樣も新聞で御承知だらうと思ひますが、現在建造中若くは計畫中の其何れにも拘らず總ての主力艦――オール、キャピタル、シップスを壞はしてしまふ、是が第一のプリンシプル、第二のプリンシプルとしましては、どうしても古船の或アマウントを壞はしてしまはう、是はレダクションと云ふ字を使つて居ります、即レデュースしてしまはう、是が第二のプリンシプル、第三番目に於ては各國の現存海軍勢力（エキジスティング・ネーヴァル・ストレングス、是は後に問題になりますが）、海軍で此アマウントを決めやうぢやないか、是が第三のプリンシプル、第四のプルンシプルは此現存勢力の比を決めるには主力艦の噸數で決めやう、即此四つのプリンシプルで海軍の制限を行はうぢやないか、是が御承知のヒューズの四箇條であります、ところが此ヒューズのプロポーザルと云ふものを私は一番初の日に貰ひまして、非常に急いで研究したのでありますが、先づ初めから之を通讀して見ますと非常に多く私の解せない點があると云ふことを發見したのであります、初めから申上げますと、此亞米利加合衆國が斯の如きプロポーザルをやめるには interests of all concerned 各國のインテレストを考へて決めたものだと云ふことを第一に歌つて居ります、是はあとから申上げますが、我々が軍備制限をするには單に各國のインテレストに依つて制限すべきものではないのであります、各國のセキューリティー、に依つて決めなければならぬのにインテレストオブ・オール・コンサーンドと云ふやうな字を使つて居ります、是が私は初め讀んだ時に不思議と思つた次第であります、其次に主力艦をどうするかと云ふこ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

とを歌つて居りますが、其主力艦は前申しました總ての新らしい船をスクラップする、言換へれば亞米利加では建造中若くは是から建造するに拘らずオール・スクラップする、さうして之が爲には俺の國では是だけ弗を費して居るのを Scrap する、斯う書いてあります、是は特に私は非常に僻見を持つて居る故か知れませぬが、亞米利加のスクラップに對してのみ必ずダラー即金と云ふ字を使つて居ります、それからグレートブリテンは四つのフード型の船のニューコンストラクションを To stop 止めてしまふ、斯う云ふ字を使つて居ります、さうして今まで出來て居る船の内、是々をスクラップすると何十何萬噸減ると云つて居ります、それから日本に對しては是から建造すべき No. 7. No. 8. の戰艦及 Nos. 5. 6. 7 及 8 の巡洋戰艦を To abandon 即放棄すると云ふ字を使つて居ります、それで特に陸奥に對しては進水しただけだと書いてあります、是は餘り皮肉な解釋か知れませぬが、ヒューズの案では亞米利加はスクラップする、英吉利はストップする、日本はアバンダンすると云ふやうにも見へます、又佛蘭西及伊太利は特殊の事情があるから別に協定すると書いてあります、最後に斯う云ふ風にしてスクラップするならば亞米利加はメーリーランドからデラウェヤまで五十萬六百五十噸になる、英吉利は「ローヤル、ソベリン」からタイガーまで取るから六十四萬四五〇噸になる、日本は長門から金剛に至るまで二十九萬九千七百噸、斯うなるのだと云ふのが亞米利加のキャピタル・シップに對するプロポーザルであります、又スクラッピングのことがございますが、時間がありませぬから大體のことを申上げますが、斯うスクラップ致しますと、十年のホリデーをやつた後に建造すべき船は合衆國及英國は五十萬噸、日本は三十萬噸、是が御承知の所謂五五三、又今後造るキャピタル・シップの各々のものは三萬五千噸に限る、斯う歌つて居ります、其次に補助艦艇のことも言つて居りまして、補助艦艇は亞米利加は四十五萬噸、英吉利も同じ、日本は二十七萬噸、之に對しては鐵砲八吋以上のは積んではいかぬとか云ふやうな色々な細いことが書いてあります、又潜水艦は亞米利加英吉利は九萬噸、日本は五萬四千噸、斯う決めて居ります、それから航空母艦は英米は八萬噸、日本は四萬八千噸、それからスクラップするのに今後何年經つてどうなつたらどうなると云ふやうな細いことを歌つて居るのであります。

そこで此案を大體通じて先づ御話して見ますと、此案の趣意は第一に軍備の制限をする爲には先程から申上げました通り建造中の主力艦を壞さなくてはならぬ、又出來て居る船の或ものを廢艦にしなければならぬ、其上に十年のネーヴァル・ホリディー——海軍休日をやらうぢやないかと云ふのが骨子でありまして、其他のことは先づ第二と見なけれ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

ばならぬのであります、そこで一般に斯う云ふことに對して先づ ネーヴァル・ホリディー海軍休日と云ふものはどう云ふものであるかと云ふことを考へなくてはならぬ、一體海軍勢力であらうが、若くは陸軍勢力であらうが、軍備と云ふものを考へる時に於て玆に必ず二つのパワーがあると云ふことを忘れることはならぬと私は思ひます、一つは軍艦とか兵隊とか鐵砲とかと云ふやうな風に表面に現れて來て實際我々が見ては是は軍艦、是は鐵砲と云ふやうな、表面に現れた勢力即、サーフェース・パワーと名付けても宜しい、此パワーが即ち軍備と普通言ふものであります、ところがもう一つのパワーは諸君及び我々が大いにやつて行かなければならぬインダストリヤル・パワー、此インダストリヤル・パワーと云ふものは表面に現れて來ない、武器となり鐵砲となる潛勢力でありますが、表面に現れて來ない、之を假にレーテント・パワーと名けますれば、此レーテント・パワーとサーフェース・パワーと云ふものは現在に於ては兩々離るべからざるものとなつて居るのであります、併ながら此二つのものは現在に於ては兩々離るべからざるものになつて居りますが、過去を考へて見れば、我々が結婚しない前のバチェラーをスピンスターと云ふが如き狀況になつて居つたかと考へます、例へば英吉利に就て申せば、英國海軍が世界に覇權を握つたのは現在ではありませぬ、既に帆船時代から世界に於て最も發達したる海軍の大きな勢力を持つて居つたので、英吉利のインダストリヤル・パワーとは大した關係が無かつた、其時分に大きな海軍を造つたので英吉利のメカニアル、エンヂニアリングは其時代の軍艦建造とは大した關係なくして獨立に發達したものである、又亞米利加合衆國に於きましては當時歐羅巴と離れて居る、其上先程申しましたモンロー主義なるものを宣言し歐羅巴から孤立して居る時代に彼等は其工業の基礎を造り遂に現在の如きインダストリーを造つたのであります、言換へれば米國は既に海軍勢力の出來る前に其レーテント・パワーなる工業勢力を造つて居ります、然るに我國に於ては後進國であるから斯う云ふことが無い、日本が海軍勢力として認められた場合にはインダストリヤル・パワーと密接な關係を持つて居つて、後進國たる我國に於ては之を引離すことが出來ない、出來ないならば、ここに十年の海軍休日をやつたならばどうなるか十年の海軍休日をやつて總ての軍事設備を撤廢し、其餘力を以てインダストリーの發展を期したとしました所が、是はなかなか五年や十年を以て我々よりも發達して居る先進國を凌駕しやう、少くともそれに追付かうと云ふことはなかなか困難である、言換へれば果して海軍休日が行はれて、各國が御互に戰をしないと云ふことが明かなことであつても、我々は短期の五年や十年のホリデーをやつては何にもならぬ、然らば何年やるか

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

何年やつたら宜いか分りませぬが、相當長期のネーヴァル・ホリデーをやらなければ效力は現れない、今度皆戰爭を廢めやうと云ふ、然らば是から三十年のネーヴァル・ホリデーをやると假定します、三十年の海軍休日をやる、其御互の協約なるものは一片の約束である、自分は約束を破らない積でも他人が破つたら何うする、言換へれば我々は國の運命を一片の約束に託さなければならぬ、元來條約なるものは各國のインテレストの關係上日英同盟のやうな條約はいざ知らず、今まで十年と續いた例が無いと云ふことを國法學者が言つて居る、斯う云ふ狀況の下に於て我々が三十年のネーヴァル・ホリデーが出來るかと云ふことを少くとも我々は技術者として、工業家として考へなければならぬと思つて居ります、然らば海軍の軍備制限を考へる前に此問題は解決しなければならぬかと云ふに、此問題は我々エンジニーヤーが解決すべき問題ではない、是は一國の政治家が考へるべき問題である、そこで海軍休日に對する良い惡い其他のデイスカッションは止めに致しまして、然らば船を壞すにはどう云ふ風にして船を壞すかと云ふと、其船を壞すに付きましては各國の現存して居る船の勢力の比に依つてやつて行かうぢやないか、斯う云ふ考である、ところがそれに對しましては出來て居る船と出來て居ない船がある、出來て居ない船は之を勢力の内に入れるか、出來て居る船だけ取るか、是は各々議論の分れる所で、互に議論があります、ところが出來て居ない船を入れたらどう云ふ風な利害があるか、之を御話して置きます。

亞米利加の「ワシントン」から「ウエストヴアージニヤ」から「ユーナイテツドステーツ」までの船がどう云ふ工程になつて居るか調べて見ますと（第二表參照）十月一日に於てワシントンは約六九、七％、是から段々降つて來てユナイテツドステーツの如きは一割七分しか工程が進んで居らぬ、ところが此工程は明かに亞米利加の造船局が公に發表して居る工程のパーセンテージであります、ところ、十二月一日に於てどう云ふパーセンテージを與へて居るかと云ふと、ワシントンは八八、〇％、ユナイテツドステーツは三〇パーセント、斯う云ふ高い數字を與へて居ります、然るに十月一日から十二月一日までに於て工程が二割以上パーセンテージが上がる理由が分らないのであ

第二表

	十月一日	十二月一日
Washington	69.7	88.0
West virginia	62.5	82.0
South Dakota	34.6	54.0
Indiana	32.5	48.0
Montana	27.6	53.0
Northcarolina	6.6	58.0
Iowa	29.5	51.0
Massachusetts	10.4	39.0
Lexington	25.5	62.0
Constellation	11.5	50.0
Saratoga	23.4	56.0
Ranger	27	64.0
Constitution	11.1	45.0
Unitedstates	10.7	30.0

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

ります、二箇月で二割上がるならば、其割で行けば一年經つか經たぬ内に四萬三千噸の船が出來なければならぬ、どう云ふ風に考へても斯う云ふ高いパーセンテージが出て來る筈がない、然るに何が故に僅か二箇月の間に斯う云ふ高いパーセンテージを亞米利加が出して來たかと云ふと、十月一日のものは造船局關係のものだけで、十二月一日のものは船體機械鐵砲、總ての入つたパーセンテージだと斯う言ふのであります、ところが我々が考へて見ると、一般船體の工程の進捗程度と云ふものは日本に於ては少くとも他のものよりは比較的パーセンテージの上がつて居る傾向を持つて居る、ところが亞米利加に於ては機械はどうかと云ふと、電氣推進であるからゼネラルエレクトリックとウエスチングハウスの二箇所しか製造所がない筈です、其外の會社ではあの大きな船の機械を造るだけのキャパシテイーを持つて居ないとと思ひます、又此等の會社で出來たエレクトリカルプロパルジョンの機械でも既成艦にては故障が澤山と云ふことも皆樣御承知の通りであります、然るに機械の工程なるものが此造船工程よりもどんどん進んで行くといふのは疑がないとは云へません、又鐵砲其他はどうかと云ふと、十六吋砲を最初に乘せた船は我國であつて亞米利加合衆國でない、而も其十六吋の鐵砲の製作は我國よりも後れて居つた、それが鐵砲だけが先きに出來てしまつて船體が後れる、此理由もをかしい處があります、又亞米利加が議會で協賛して居る海軍の經費の高と云ふものは毎年決められた高であつて、我國の如き繼續豫算が成立して居るのではない、それが前記の理由でこれからこれまでの間に二十パーセントと云ふ工程が上がるといふのは不思議だと自分は考へた、少し疑ひ過ぎた話しかも知れませんが或は十月一日に關係國に對して軍備制限と云ふものに對する勸誘狀を出して、制限しやうではないかと言つてから、我々は正々堂々とやつて行つたのに亞米利加は我々に此勸誘をした後十二月一日までに晝夜兼行で工事を急いだのではないかとも考へられます、或人の話では特に職工を增し或ものは賃銀を增して工事を急いだとも云つて居ります、然らば斯の如くして出て來た工事のパーセンテージと云ふものを頭から信賴することが出來るか、疑があります、此工程のパーセンテージなるものには色々なアムビヂユイチーが入つて來るといふ事は明であります、又排水量の意義に就ても考へて見ました、例へば陸奥の三萬三千八百噸を考へて見ますと陸奥の三萬三千八百噸と云ふものと亞米利加の三萬三千八百噸と云ふものとは全然意義が違ひます、言換へれば亞米利加は全體の Consumable material を 2/3 搭載したデイスプレースメントを取つて Normal displacement と名付けて居ります、言換へれば日本の船の三萬二千噸と云ふのは亞米利加の三萬二千噸よりは遙かに大きな船

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

であります、然るにも拘らず日本の船の噸數に持つて行つて亞米利加のアッシュームした噸數の差を加へて、是が御前の國の軍艦を自分の國の軍艦と見た時の噸數だといふのです、即日本の船に米國のアッシュームしたコンシーマブル・マティーリヤルを積んで亞米利加のデイスプレースメントと同じだと云ふのがヒユーズの書出した數字であります、ところがそんなことが分るものではない、日本の船が燃料、糧食、水等を何噸積んで居るかと云ふことが米國に分る譯はない、宜加減の數を出して俺の所では是だけあるから是だけだらうと云つて捉まへて來たものが此トンネージの數字であります、言換へれば玆にトンネージを決めるには船を比較する一定の規則を定めてそれに依つて各國の全體のトンネージを決めなければ成らぬのであります、亞米利加でエステイメートした數を私がチエックして見ますと陸奥とか天城とか云ふやうな新しい船や、バツトル・クルーザーの樣にハイ・スピードのキヤピタルシツプに於きましては日本のノーマル・ディスプレースメントに九パーセント乃至十パーセントを加へますと大體亞米利加のトンネージになります、又中古の超弩級艦の如きは六パーセント乃至七パーセント加へますと亞米利加のデイスプレースメントに近いものが出て來ます、それからもう少し古い香取鹿島以前の船になりますと、日本で言ふデザイン・ディスプレースメントに約二パーセントを加へると亞米利加のデイスプレースメントになつて來ます、ところが亞米利加のエステイメートしたものは何れも四パーセント乃至三パーセント半位にしかなつて居ない、要するに亞米利加のエステイメートしたものはアンダー・エスティメートであります。

建造中の艦船を壞し、又既成艦船の或ものを壞して、其時に亞米利加は是だけの犧牲を拂つて居る、我々は十五隻のキヤピタル・シツプを叩壞ち、是に要する金は何萬ダラー何十萬ダラーと云ふことを言つて居ります、然るにヒユーズの案はどう云ふことになつて居るかとアナライズして見ますと、第三表に示す樣廢棄すべき主力艦の總噸數と現存主力艦の總噸數との比又は既定計畫完成時に於ける主力艦の總噸數との比を取つて見る

第三表

比	日本	米國	英國
廢棄さるべき主力艦總噸數 / 現存主力艦總噸數	1.781	1.161	0.496
廢棄さるべき主力艦總噸數 / 既定計畫完成時に於ける主力艦總噸數	0.739	0.628	0.402

と言換へれば現在の主力艦の總噸數の何パーセントを壞さなくてはならぬかと云ふと、日本は一・七八一、亞米利加は一・一六一、英吉利は〇・四九六と云ふことになる、又廢棄

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

すべき總噸數と日本に於ては八八艦隊計畫、亞米利加は三年計畫、英吉利に於ては新戰艦計畫、それ等の完成した時に於ける主力艦の總噸數との比を取つて見ると、日本は〇・七三九、亞米利加は〇・六二八、英吉利は〇・四〇二であります、此數は何を表はして居るかと云ふと、各國の拂ふべき犧牲のアマント、而も此犧牲の高は亞米利加は僅しか拂はずして日本は一番餘計犧牲を拂はなければならぬ、英吉利は一番少い犧牲で濟む、言換へれば亞米利加は十五隻のキャピタル・シップを壞すからと云つて是が犧牲のパーセントぢやない、現在持つて居る船の數を考へなければならぬのであります、戰をして船を壞されれば其勢力から何パーセント減るか、といふ事が大切な事で軍艦の數が少い海軍で一隻沈みますのと、軍艦の多い海軍で二隻沈みますのでは一隻沈みます方が苦しい事は度々あります、それと同じことであります、然るに亞米利加の言ふ所は俺の方は是だけ壞す、俺の方は一番餘計犧牲を拂つて居る、御前達は是だけではないかといふやうな考は金高や船の數だけで云ふべきものでなく其海軍勢力の何パーセントに成るかといふ事が大切であります。

現存勢力と云ふものは制限しなければならないならば、現存勢力と云ふものはどう云ふものであるかと云ふ定義を下さなければならぬ、ところが私共の考へる所では、現存勢力と云ふものは現在浮んで居つて、今戰が始まつたら直ぐ戰鬪航海に堪へ得る所の主力艦のトンネージを捉まへて之を現存勢力と言はなければならぬ、現在戰が始まつた、其際に戰鬪し得る艦船の噸數が是がエキジステイング・ストレングスでなければならぬと思ふ。さうであるならば建造中の艦船は考に入るべきものではない、極端な例を以て御話しますと、生れない前の子供の人格を認めるかといふ事であります、生れてしまへば庶子であらうが、私生兒であらうが、區役所に御屆しやうがすまいが、パーソナリテイーを認めなければならぬ、ところが或人の考では人間の子は死んで生れるかも知らぬが船は必ず出來ると云ふけれども、船も進水の時に倒れてしまふこともある、そこでエキジステイング・ストレングスなるものはどうしても現在浮んで居る船である、さあ戰をしやうと云つたら太平洋上に於て戰をし得るものでなくてはならぬ、是から出來て來るものはフユーチユア・ストレングスでなくてはならぬと自分は考へます、そこでエキジストして居ない船をエキジステイング・ストレングスと云ふならば建造中の艦船に對してはどう云ふ點をやるか、亞米利加の言ふには出來掛つて居るものは其船の噸數に工程のパーセンテージを掛けたものが其船のストレングスだと言ひます、五割だけ出來て居て、それで五割の戰鬪力を持つて居るか、まだ浮ばずまだ出來ない船が工程がどれだけ出來て居

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

つても戰鬪航海は出來ないのである、暫く經つてからのストレングスを我々が言ふならば千九百二十一年の十一月十一日と云ふ日を捉まへて言ふの必要は毛頭無いのであります、而も千九百二十一年の十一月十一日と云ふ日を歌ふ以上は其日に於てエキジストし

第四表

弩級艦分類

A 分類		B 分類	
U. S. A.	JAPAN	U. S. A.	JAPAN
N. Dakota	Settsu	Michigan	Satsuma
Delaware		S. Carolina	Aki
Utah		N. Dakota	Settsu
Florida		Delaware	
Arkansas		Utah	
Wyoming		Florida	
		Arkansas	
		Wyoming	

第五表

米式算法(陸奥ヲ既成艦トシタル場合)

	米國		日本	
	A	B	A	B
前弩級	1,074,764		630,742	* 591,321
弩級	100%		59%	55%
超弩級及建造中のもの	100%		70%	56%
弩級	827,024	879,024	416,062	450,092
超弩級	100%	100%	49%	51%
及建造中のもの	100%	100%	61%	64%
超弩級	711,374		394,692	
及建造中のもの	100%		50%	
	100%		72%	

* 富士石見周防を除外の場合
太字は造船局發表の工程による

米式算法(陸奥ヲ未成艦トシタル場合)

	米國		日本	
	A	B	A	B
前弩級	1,074,764		623,742	* 556,321
弩級	100%		58%	52%
超弩級及建造中のもの	100%		69%	65%
弩級	847,024	879,024	409,092	449,392
超弩級	100%	100%	48%	51%
及建造中のもの	100%	100%	61%	64%
超弩級	711,374		387,692	
及建造中のもの	100%		5[illegible]%	
	100%		72%	

* 富士石見周防を除外の場合
太字は造船局發表の工程による

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

て居らなければならぬ、是はエキジスティング・ストレングスと云ふことに對して我々の考へましたのと亞米利加の考へましたのとは違ふのであります、そこで亞米利加の言ふが如く勘定して見たならば兩方の海軍勢力はどうなるか、斯う言ひますと第五表に示す通である。

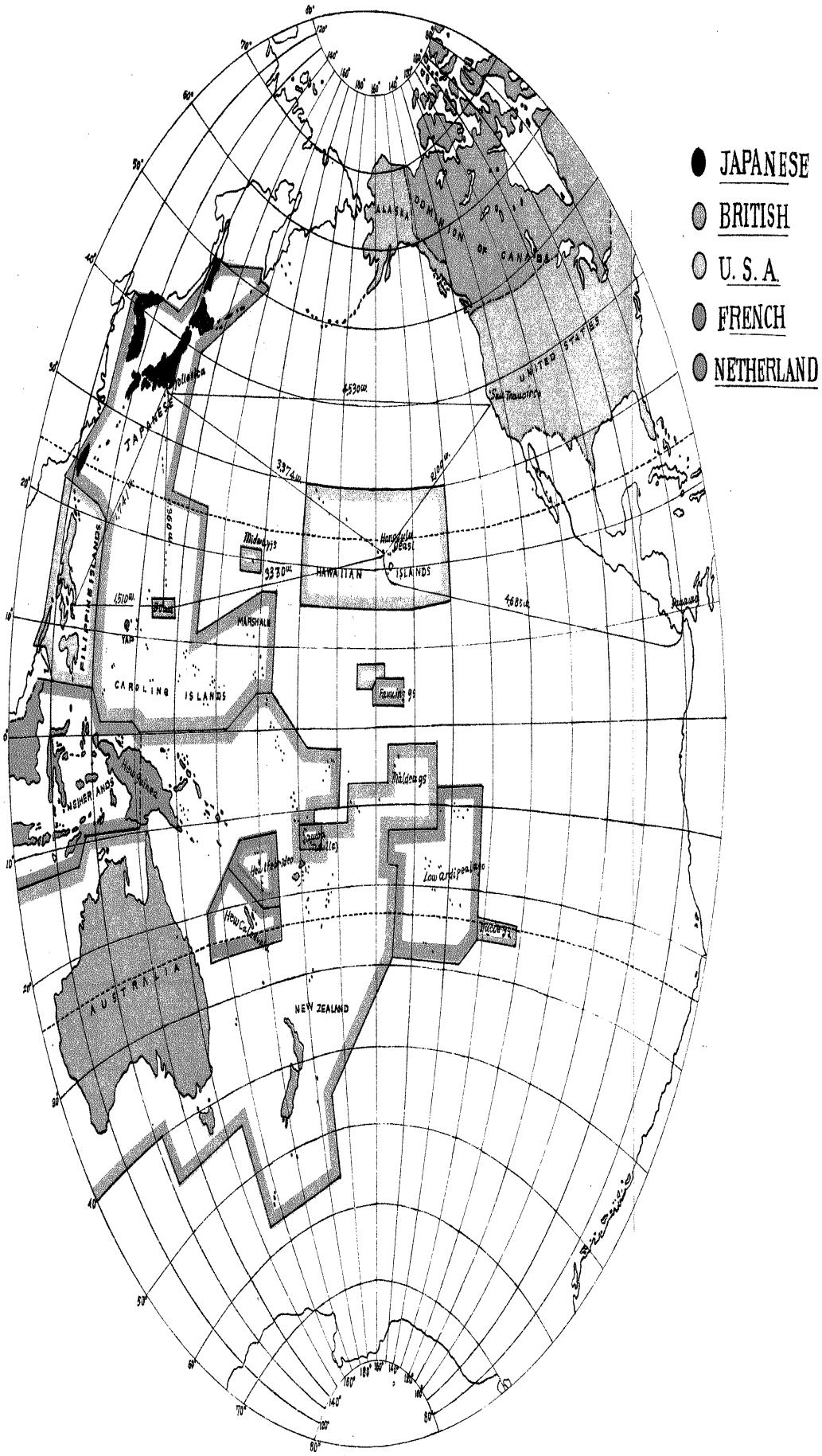
陸奥を既成艦とした場合に第四表のA分類法に從ひ前弩級、弩級、超弩級を取り建造中のものには先程申しましたやうなあやふやなファクターを掛け、それを總て加へましたもので、勘定するならば亞米利加が百七萬五千噸、日本は六十三萬七百四十二噸、又B分類法により前弩級、弩級、超弩級及び建造中の艦船を亞米利加の勘定した所では日本は五十九萬噸しか無い、又亞米利加の計算に依りまして前弩級と云ふものを廢めてしまふ、さうして弩級、超弩級、建造中のものを加へれば亞米利加は八四七,〇二四噸、日本は四一六,〇九二噸、此レシオは亞米利加を百とした場合に日本は幾らになるかと云ふと四十九パーセントにしかならない、それから弩級も廢めてしまひ、超弩級と建造中の艦船を加へて見るならば亞米利加は七一一,三七四噸、日本は三九四,六九二噸、此レシオが亞米利加を百とすれば日本が五十六パーセント、それだからどう勘定しても日本は亞米利加の六割以上の勢力は無い、是が亞米利加の主張する點であります、そこで亞米利加の主張するエキジステイング・ネーヴアル・ストレングスはオール・キャピタル・シップ・トンネージと云ふものを先程も申上げた通りにヒューズのプロポーザルに歌つて居る、オール・キャピタル・シップと云ふものはどう云ふものか、船の古い新しいに拘らず總ての主力艦全體の噸數と云ふものがオール・キャピタル・シップ・トンネージでなくてはならぬ、然るにも拘らず亞米利加政府の主張するのはエキジスティング・ストレングスと云ふものはアンダー・コンストラクションの艦船と弩級及び超弩級、斯う云ふ意味であります、而もヒューズのポロポーザルには何等さう云ふことを書いて居らぬ、唯オール・キャピタル・シップ・トンネージと云ふことを歌つて居る、それに依つて亞米利加が勘定した所では陸奥を勘定した場合日本が四十九パーセントしか無い、言換へれば四十九パーセントしかないのに六十パーセントやるのだから有難く頂載をしろ、斯う云ふ考であつた。

ところがそれならば弩級と超弩級と云ふものをどこで分けるか、成程、弩級は一番初めて出來た時にはスティーム・タービンを使ひ、さうしてユニホーム・カリバー、ガンスであつたと云ふことは弩級の特徴であつた、果してさうであれば亞米利加のやりました分類の方法は、ノースダニタ、デラウェア以後、此船を捉まへて來てドレッドノート、日本は攝津以後が弩級、ところが亞米利加のミシガンサウスカロライナは主砲が二つ、而も

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

The Pacific Ocean



NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

センターラインに置いて居る、此二つのものを弩級の中に入れない理由が無い、我國に於ては安藝薩摩が之れにマツチするドレツドノートと考へる事が出來る、それに造船家として嚴格なる意味から言ふと弩級でないかも知れない、併し戰鬪力から言つて安藝薩摩がノースダニタ・デラウェアに較べて劣つて居るかどうか、是は誰にも分らない、英吉利のロード・ネルソンとは趣を異にして居る、そこで我々の考では安藝薩摩攝津は我々の方では當然入れる其代り御前の方ではミシガン、サウスカロライナも弩級ではないか、是も入れたら宜いぢやないか、之を入れないで此二つを取つたのは是は内幕があるに違ひないと思つた、是はミシガンもサウスタロライナも弩級に入れないと、矢張り日本の安藝薩摩も入れられないと云ふのは比較的戰鬪力の少いミシガン、サウスカロライナを入れるより安藝薩摩を除いて攝津から勘定した方が全體勢力比に都合がよいと考へたのかも知れぬ、又さうであると考へられても仕方がないのであります、ところが亞米利加の分類したBと云ふ方法がある、亞米利加の主張する如く單に超弩級及び建造中の艦船を入れると日本は六十四パーセント、又亞米利加の主張する如く、又ヒューズのプロポーズするが如く、オール、キャピタル、シツプ、但し日本は建造中のは入つて居ない、之を入れても日本は六十五パーセントと云ふ數字が出て來る、言換へれば是は分類の方法に依りまして斯う云ふ風に分類されたことは先程申しましたやうな疑惑も起り得る、併し之を避けて分類すれば日本は六割以上になる、是は亞米利加の勘定の仕方を以てしても斯うなるのであります。然るに日本の主張するが如く勘定するとどうなるかと云ふと、日本は陸奥を既成艦とした場合、未成艦とした場合でも‥‥

〔圖を指示す〕（第六表參照）（第七表參照）

第六表　日式算法

未成艦除外の場合（陸奥を含む）		米國 A	米國 B	日本 A	日本 B
	Pre D. Sup.	728,390 (100%)		549,350 (75%)	富士、石見、周防を除外の場合 509,920 (70%)
	D. Sup.	500,650 (100%)	532,650 (100%)	334,700 (67%)	375,000 (70%)
	Sup.	365,000 (100%)		313,300 (86%)	
	百分比平均	100	100	76	

第七表　日本式計算法

未成艦除外の場合（陸奥を含まず）		米國 A	米國 B	日本 A	日本 B
	Pre D. Sup.	728,390 (100%)	532,650 (100%)	514,350 (71%)	富士、石見、周防を除外の場合 474,929 (65%)
	D. Sup.	500,650 (100%)		299,700 (60%)	340,000 (64%)
	Sup.	365;000 (100%)		278,300 (76%)	
	百分比平均	100	100	69	

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

こちらは陸奥を未成艦とした場合ですが、日本の言ふ如く勘定すればどうなるかと云ふと、日本は弩級超弩級、是は現在戰が始まつた時に戰鬪航海に堪ゆる船、直ぐ出て行ける船、言換へれば千九百二十一年の十一月十一日に於けるエキジスティング・ストレングス、私共の信ずるエキジスティング・ストレングス、之を勘定して見ると、亞米利加は七二八,三九〇噸、日本は五一四,三五〇噸、言換へれば亞米利加の百に對して日本は七十一パーセントの勢力を持つて居る、又弩級と超弩級をヒューズの案と違ひますが、亞米利加の言ふが如く勘定して見れば六十パーセントしか無い、富士、石見、周防などは既に二十年の艦齡が過ぎて居りますから之を除外して見ればこんな風になつて六四パーセントと云ふ數字に變つて來る、又超弩級だけなら十一月の十一日に戰が始まつて實際第一線に出て鬪ふものは超弩級であるならば超弩級だけ勘定して見ますと、亞米利加は三六五,〇〇〇噸、日本は二七八,三〇〇噸、日本は亞米利加に對して超弩級が七六パーセントと云ふ高い勢力を持つて居る、之れは陸奥を未成艦とした場合ですが既成艦とすれば第六表に示す通最低の場合でも六七%超弩級なれば八六%といふ更に高い數字となります、故に彼等の主張する所が眞であつて我々の主張することが間違て居ると云ふことが明かに證明さるゝに非れば數字上に七十%は過多なりとは云へない筈である。

斯う云ふ狀況であるから少くとも勢力比を數字的に研究して見ると我々は亞米利加の六割と云ふものに對してイールドすることは出來ない立場にならなければならぬと云ふことが御分りになると思ひます。

そこで更に飜りまして何故に我らが七十パーセントを持つと云ふことが亞米利加に對してメネースであるかと考へて見ます。元來他國が御前の所は七割は要らない、六割で宜いではないかと云ふのは無禮極まる話でありまして、理論上は相對國の持つべき勢力ばイーコールであるかゼロでなくてはならぬ。金の有無、或は人口の多寡、若くば土地の大小は別箇の問題でありまして理論上は貧乏人でも金持と同じだけ持ち得る權利があります。然し實際上は其國のセキューリテイー、國のインテグリティーを侵さぬ程度を最小限度とします。金持だからと云つて大きな家を建てる權利がある、貧乏人だからと云つて大きな家を建てる權利が無いと云ふことは無い、建てる金は無いが建てる權利は持つて居る此權利を拋擲する必要は無い、併ながら其權利は別として我々は現在に於て金も無し、貧乏で、百萬圓の家を建て難いから七十萬圓の家で濟まして居るのに過ぎない、御前の所は七十萬圓の家では贅澤だ六十萬圓の家を建てろ、と斯く我々個人として質問したら諸君はどう御答なさる、我々の持つて居る七十パーセントと云ふものが亞米

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

利加に對してメネースであるならば、彼等の持つて居る十割と云ふものは我々に對して更に一層の脅威でなければならぬ、我々が持つて居る七割と云ふものが亞米利加に對して脅威であるならば彼等の持つて居る百パーセントと云ふものはより以上の脅威である。何故に彼等が脅威無しと言へるか、又先程申しました通りに我々が是だけの國防をしなければならぬのは國の權利である。我々のナショナル・ライトであつて、實際には國家を認める以上國のセキューリティー、國の安全から出て來る。どうしても是だけは自分で決定すべきで外から決定せらるべき問題ではないと思ひます。是は國防上の問題であつて、どうか諸君も能く御考へになつて載きたいと思ひます、徒に唯技術の事だけを考へましてさうして、根本の問題を沒却して居つた人が隨分あつたやうであります、どうしても是は根本のプリシプルとして我々のナショナルティーとして國民を認め、國家を認める、其立場に立つて主張して行かなければならぬことであると思ふのであります。

而も此議論に對して亞米利加のネーヴァル・エキスパート又は多くの人々は反對論を出して居ります、其反論はどうかと云ふと、例へは日本の海軍の費用は國の全體のインカムに較べて見ると是だけである。然らば日本は是だけの高い金を拂つて居る、又は俺の所は是だけの富を持つて居る、金を持つてる、アマウントが違ふではないか。どこを掘つても油が出る。石炭が出る、御前の所は何も無い。又俺の所は大きな國で、御前の所はカリフォルニヤやテキサスと同じ位な小さなもではないか、又俺の所は太平洋に面し、大西洋に面して、海岸は兩方にある。然るに御前の所は極東に偏在して居る小さな國ではないか、又俺の所のコーストラインは是だけある、御前の所は是だけしか無いと云ふ反論を出して居る、是は皆樣御聞きになつたでありませうが、一般の人には入り宜い議論である、尾崎さんの軍備制限論のやうなもので、俺の所は何割の金を軍事に使つて居ると云ふやうなものである。是は床屋さんや八百屋さんには非常に分り易い議論であります。併ながら斯の如き議論は根柢を誤つて居る議論であります、我々は存在しなければならぬ、我々が日本國民として日本人であると云ふ看板を下げて、さうして易々亞米利加の黑人であるが如く、印度人であるが如く、猶太人であるが如く、それ等と同じやうな境遇にまで成下がる氣ならば國防などは論何んでも宜しうございます。少くとも日本の國を認め、日本の國力を認め、日本人としての立派なるナショナリティーを發揮して進んで行かなければならぬと云ふ場合に於て我々はどうしても是だけのコストを拂はなければならぬ、是だけの金は必要だと云ふ其ミニマムと云ふものは決まる譯であります、最高度は限りない、言換へれば、具體的の御話をする此處に三人の人があ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

る、此處に十人の人がある、三人の人は僅に一日に一圓づゝの金しか貰つて居ないが、此三人がどうしても三人のグループとして三人の國を認められなければならぬならば、例へばAならAと云ふ國を認めなければならぬならば、其國を二人が自らデフェンスし外から來るアッタックに對して自ら防禦し得らるべき器を持たなければならぬ。又同時に金持の百人の人間も大きな國家として認めるならば三人のアッタックトに對して防禦する武器を持たなければならぬ、此場合には一人頭に對して御互に防禦する金の高はどうかと云ふと百人の人が持つて居る國は一人頭にして安い金で防禦が出來るのであります。であるから、其三人の人間が其國家としてのエキジステンスを認めず金が無いから廢めてしまをう、又は百人の仲間に入つて終うと言ふならば別ですがどうしても三人として國家を保持して行かなければならぬと云ふ考を持つならば、言換へれば日本人は金が無いが、小さい國民だらうが、大きな國民だらうが、日本人としての日本の國旗を立てなければならぬ。又デフェンスをして自ら生存しなければならぬのであるから其ミニマムと云ふものは當然決まらなければならぬ、是は疑ふ餘地が無い、言換へれば金のどの位の高が、何パーセントが使はれて居るかと云ふことはミニマムに就て云はる可き議論である。斯う私は信じて居ります、又領地が多いが故に大きい海軍を持たなければならぬと云ふならば、英吉利の全體のドミニオンは亞米利加に比較して數倍であつて世界各地に散在して居る、然るにヒューズのプロポーザルには英吉利と亞米利加は同等だ、ドミンオンを歌ふならば何故に亞米利加は英吉利と同じ海軍を持つと云ふことを言へるか、主張する理由が無いと言はなければならぬ。而も日本に對して御前の國は是だけで宜いと主張しながら、我々は百でなければならぬと云ふことを主張する理由は無いと考へます。又亞米利加はコースト・ラインが多いから是だけ大きな海軍が要ると云ふやうな事柄はちよつと素人向に分り宜い事柄でありますが、コースト・ラインは海軍とは一程度迄は關係はあるが其以上の關係は無い言換へれば亞米利加の太西洋太平洋全體のコースト・ラインは濠太利の全コースト・ラインより小さい、言換へればコースト・ラインで行けば濠太利の海軍は亞米利加の海軍より大きな海軍を持たなければならぬ、それであるから御前の國はコースト・ラインが少いから小さい海軍で宜いと云ふ議論は成立ちませぬ、斯う云ふやうに根本的に所謂ミニマム・デフエンスと云ふ確かな根據のある所に立てた議論でなければ議論として成立たない、……勿論政治家としての議論は違ひます、政治家として考へるのではなしに、兎に角ネーヴァル・エキスパートとしては斯うでなくてはならぬと云ふ風に自分は深く考へたのであります。

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

ところが當時、日本に於ける輿論はどうであつたか、日本から如何なる輿論が揚がつて來たか、少くとも私は知らない、芝公園に於て上泉中將が七割が六割になつたならば全權を横濱に上陸させないと言つたと云ふ報知があつたきりで、日本には日本の主張すべき點をサポートするだけの輿論が起つて居りましたか、是は疑を挾まざるを得ない、我らは日本人として殘念に思ひました、而も亞米利加に來て居る人の中には物事を能く考へないで勝手な議論をして居た人もあります。又まあ亞米利加と日本と戰をしたところで何も儲かりはせぬ、儲からないから六割貰つたら澤山だ、五割でも四割でも宜からうと云ふやうなことを勝手に言つて居つた人もあつた、又當時亞米利加に來て居つた或團の中には亞米利加と親善しやう、非常に結構であります、併ながら其内の或人は自分も工場を持つて居るのでせう、どこか工場を三つ四つ見て來て自分の所の工場と較べて自分の所の方が劣つて居る。それで、亞米利加と云ふ所は非常に恐しい所だ。大きなことをやるものだ、其位だから日本は六割も頂戴したらば大變結構であらう、と云ふやうな人があつたそうです。又極端に、亞米利加の貿易は日本の總貿易の七十五パーセントである。是は非常に良い御得意である、ところが戰をして比律賓ホノルルを取り、カリフォルニヤを攻めて彼處に兵隊が上陸した所が割に合はぬ、それよりも七十五パーセントの大きな御得意を無くしてしまふ方が損ではないか、斯う云ふ風な極端な平和論者もある。

要するに何れに於ても此問題を出しても根本の違ひは建造中の艦船を入れるか入れないか是が勢力の問題に大分エフェクトがある、併ながら兩國ネーバルエキスパートの主張は全然此點に於て一致しないのであるから、其以上は國の一般の政策、一般の外交政策と成るのであります。

要するにネーヴァル・コンミッティーと云ふものは、御互に立場が違ふから話が纏まる筈はない、と云ふので十五人委員會と云ふものが出來ました。其當時は佛蘭西と伊太利が入つて參りました。其結果五人の全權にネーヴァル・エキスパートが一人、アッシスタントが一人、三人づゝ五箇國で十五人、それでコムミッティーが出來た、其後此問題は十五人の委員會に依つて討論することに移づて來たのであります。

先づそれを御話する前に當時起りました太平洋の防備問題を極々簡單に御話して置かなければならぬ。

其當時問題になつて來て居りましたのは先程申上げた通りに太平洋、太平洋は其名の如く果して太平であるか、亞米利加人がパシフィクは平和の Cradle であるか、Cockpit

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

であるか、と云ふて居ります。御覽の如く亞米利加は太平洋の眞中に布哇アイランドを持つて居ります、少し行つてミッドウェー・アイランドを持つて居ります。それから少し先に行つてグアム、それからヤップ、それから比律賓、斯う云ふ風に布哇から之に掛けてずつと線を引いたやうに島嶼を持つて居ります、そこで此島嶼は若し此島嶼の總てに於て非常に多くの金を費して防備をしたならば、日本は丁度袋の中の鼠、トローラーに掛つた魚のやうになつてしまふのであります、そこで我々はグアムとか比律賓とか云ふ日本の鼻の先に持つて行つてピストルのやうなものを突付けられて、どうだ御前は喧嘩するかしないか、御前はイールドするかしないかと云ふやうに威かされて居ると同じこと、そこで太平洋上に在る色々の島嶼に於ける各國の勢力範圍を見ますと、こんがらかつて居りまして、丁度戰爭前の巴爾幹半島に於ける各國の狀況と同じやうな風に殆ど各國の勢力がコムバインして居る。そこでホノルルに防備をした所で、非常にオープンスペースであつて、フォルティフィケーションには迚もならない、そこで布哇が亞米利加のファースト・ラインのディフェンスと言つた所で、大して我國に脅威を感じない。併ながらグアムとか比律賓とか云ふ所に防備された日にはグアムは横濱まで千三百二十浬、比律賓は千七百六十一浬、斯う云ふやうな所に防備をされたならば小笠原や奄美大島は問題にならない。此防備を現狀に止めさすことは日本に對するメネースが非常に減つて來るのであります。其結果太平洋の防備問題と云ふものに付て皆さん御氣が付いて居るか知れませぬが、比律賓の防備——フォルティフィケーションと云ふものは、日本に對する脅威ばかりでなく、英吉利の香港、新嘉坡に對して寧ろ非常なメネースを成して居ることは明かである、それであるから比律賓の防備が無くなると云ふことは太平洋を實際に太平洋にして行ける。英吉利にしても又日本にしてもさう云ふ考に違ない、さう云ふやうな色々な點からしまして皆さんの御承知のやうに太平洋上の防備問題と云ふものが起りました、其結果、亞利米加はこれからこちらは防備をやらぬ、其代り日本は小笠原や奄美大島には防備をやらぬ、斯う云ふ風なことになつたのであります、是は防備問題で私の專門外であるから詳しく申上げることは避けたいと思ひます。

それから先程申上げました陸奥の問題、陸奥が既成艦か未成艦かと云ふ大問題が起きて來て居ります、ちよつと極く簡單に此事柄を御話して置きたいと思ひます、一體船が完成したかしないかと云ふことはどうして分かるか此船は完成して居る、あの船は完成して居ないと云ふコムプリート、インコムプリートに對してデフィニションがありますかありませぬ、又日本の艦船造修規則に於きましても、船の完成と云ふことに對して何等

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

明文に規定したものはありませぬ、又亞米利加の色々なネーヴァル・レギューションを調べて見ても船の完成と云ふことはどうなつたら船が完成した、どうなつたら未完成だと云ふことは歌つて居らぬ、併ながら亞米利加の規則に依りますと、船の完成未完成は別問題として、船がコンミッションしたものであるか、ノンコンミッションであるか即船が就役したものであるや否やと云ふことに對しては艦船が全體の定員を持つて居る場合にはコンミッションした船、全體の定員を持つて居ない船はノンコンミッションの船、言換へればノンコンミッションの船は全體の定員を持つて居りませぬ、是は亞米利加のネーヴァル・レギュレーションにちやんと書いてあります、それからもう一つはコンミッションしたと云ふのはトライヤルー船の運轉に非常に關係を持つて居る、是は亞米利加に於きましては二つの方法に依つて船の運轉を決める、其一つはプレリミナリー・アクセップタンス・トライヤル (Preliminary acceptance trial) と稱して居ります。もう一つはファイナル・アクセップタンス・トライヤル (Final acceptance trial) と名を付て居ります。プレリミナリー・アクセップタンス・トライヤルと云ふものは造船所等が船の建造を引受けました時に此船が契約のスピードが出るかどうかと云ふ試驗に過ぎけない。日本で言へば全速公試だけやるのでありましてさうして、契約のスピードが出たらコンミッションしたことになる、言換へればデート・オブ・トライヤルと云ふものとデート・オブ・コンミッションと云ふものが同じになつて居る。さう云ふことが先例になつて居る。ところでファイナル・アクセップタンス・トライヤルと云ふものはどうなつて居るかと云ふと、日本で言ふプログレッシーブ・トライヤルで、色々な速力で走つて計つて行くのがファイナル・アクセップタンス・トライヤル、此ファイナル・アクセップタンス・トライヤルは船がコンミッションして六箇月經つて艦員の手に依つて行ふ、斯う云ふことになつて居る、ところが果して然らば陸奥はどうかと云ふと陸奥は十月の十五日に日本のプログレッシーブ・トライヤルが濟んで居る、言換へれば亞米利加のファイナル・アクセッタンス・トライヤルは濟んで居る。定員は總て乘つて居る、それならば何がインコムプリートであるか、鐵砲の公試が濟まない、少しばかりどこかコンミュニケーションが足りない、ところがそれならば亞米利加のファイナル・アクセップタンス・トライヤルはどうかと云ふと、鐵砲の公試發射は艦員がやる、日本は造船官が立會つて造兵官がやる、水雷發射も同じである。それから言つたら陸奥が未成艦と云ふことはどこで言へるか。其當時メリーランドが御承知の如くデフュクティーブの船であつて、是が六箇月經たない内にファイナル・アクセップタンス・トライヤルをやらうと云ふ腹であ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

つたと云ふことは公文にも出て居ないが、新聞雜誌其他に徵して明かであります。ところがアーマチュアを毀しましたか、電氣推進機械を毀しましたか、非常な大修理をやらなくてはならぬと云ふ兎に角デフェクトがあつたらしい、ところが丁度我々が陸奥は既成艦であると考へて居つた時分にボストンのドックヤードに入つて居りました。そこでメリーランドはファイナル・アクセップタンス・トライヤルに、日本で云へば全力公試運轉に失敗をしてドックヤードに入つた船、言換へれば陸奥が未成艦であるならばメリーランドも未成艦でなければならない、なぜなればファイナル・アクセップタンス・トライヤルが濟んで居らない、完成して居ない、而もドクヤードに修理に入つた船、斯う云ふ事から陸奥が未成艦であるならばメリーランドも未成艦でなければならない、隨つて此問題を論ずるに當り陸奥は既成艦であると云ふことを主張しても亞米利加は一言も言ふ所はありませぬ、それであるから要するに陸奥は既成艦未成艦と云ふことは兎に角陸奥を入れるならは俺の所の斯う云ふものを入れて呉れ、斯う云ふことになつた、さうすれば要するに初の色々なプリンシプルと云ふものは破れてしまふから、又プリンシプルを作らなければならぬ、ところが先程も御話しましたが、今造つて居る船を勢力の内に入れますと、是から十年經つてリプレースする時には、其船がコムプリートすると三箇月經つてから壞さなくてはならぬ、其狀態に於ては船が二隻あることになる、言換へれば出來上つた船が一つありますと、前の船はリプレースした船がコムプリートしてから壞すのでありますから、其時には勢力が二隻になる、アンダー・コンストラクションのものを勘定に入れるとさうなる、是だけは前に申上げませぬでしたが、それは別問題として要するに建造中の艦造をスクラップしないで其内何か生かさう、又英吉利もニューフード型を二隻入れたい、斯う云ふ考を持つて居つた、此問題の可否其他に關しては討論に入りますからここでは申上げたくないと思ひます。

そこで斯の如くしまして亞米利加と英吉利と日本とのレシオと云ふものは決まつた。兎に角斯う云ふ風な狀況でキャピタル・シップだけが決まつたのであります。

其次に出て來る問題は潛水艦の問題、而もキャピタル・シップに對しては佛蘭西及び伊太利のキャピタル・シップの問題が何等決まつて居らなかつた。それは佛蘭西伊太利は其以後海軍問題に入つて來た、それまでは聽衆として傍聽をして居つたに過ぎなかつたのであります。そこで佛蘭西に對して御前の所は十七萬五千噸で宜からう、言換へれば英米は五十萬噸、日本は三十萬噸、それから佛蘭　十七萬五千噸、是で宜いではないかと云ふ話になつて來ました時に、佛蘭西の方は斯う云ふ主張をした、現在持つて居

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

る海軍の勢力に依つて其國の勢力比を決定しやうと云ふことは佛蘭西に取つては甚だ迷惑至極の話である。なぜならば佛蘭西は戰爭の始まつた當時から現在まで實際船を造つて居らなかつた。言換へればヒューズの言ふネーヴァル・ホリデーを佛蘭西は七年前からやつて居る、佛蘭西は御前達のやる前からネーヴァル・ホリデーをやつて居るので今持つて居る船は少いが、それをやらずにずつと續けて來たならば三十萬噸持つて居らなければならない、戰爭の狀況で斯う云ふ風に陸軍に全力を注がなければならなかつた。それで其上にネーヴァル・ホリデーをやれと云ふことは佛蘭西に對しては二重の課稅をすると同じことだ、斯う云ふ主張をした、是も相當の理由のある議論と思ひます。それであるから俺の所は十七萬五千噸にするのは迷惑至極な話である、是は承知することは出來ない、そこで首相のブリアンが歸りまして、英吉利に駐在して居ります亞米利加大使のハーヴエーに會ひまして、ブリアンが佛蘭西は十七萬五千噸を引受けると云ふことをハーヴエーに話したと云ふ電信が亞米利加の國務省に來た、ところが是はブリアン一個の考であつて、佛蘭西の政府の主張ではない。佛蘭西政府の考では佛蘭西は十七萬五千噸を引受けるが、潛水艦は英米と同じものを主張する。斯う云ふことになつて來た、さうして、ネーヴァル・ホリデーは西蘭西は實際餘程前からやつて居るから、佛蘭西には千九百二十七年から船を造らして呉れ、斯う云ふ提案を出して居る、ところが英吉利は當時潛水艦全廢論を出して居ります、其理由とする所は約五箇條程ございました、是も皆さんの御承知のことであると思ひますが、現在各國が持つて居る潛水艦の噸數は、亞米利加が八萬三千五百噸、英吉利が八萬五百噸、日本が三萬二千二百噸、佛蘭西が二萬八千三百六十噸、伊太利が一萬八千二百五十噸、斯う云ふものであるから、ヒューズの案の如く、英米が九萬噸、日本が五萬四千噸、斯う云ふことでは潛水艦擴張になるだらう、是は面白くない、又潛水艦は弱國の防禦の武器だ、沿岸各地に入用なものである。斯う言ふけれども自分の方の專門的の見地から言へば潛水艦と云ふものは今度の大戰の經驗から言へば全然さう云ふ考は誤つて居る、斯う云ふことを主張した、是は英吉利の意見であります、假に潛水艦が防禦的に必要なものであるとするならば世界各地にディストリビュートして居る、澤山のドミニオンを持つて居る英吉利は各國よりも何十倍と云ふ餘程澤山の潛水艦を持たなくてはならぬではないか、要するに潛水艦と云ふものは戰鬪部隊でない商船其他を攻擊する、人道上許すべからざる武器である。是はどうしても飛行機やなにかと違ふ。さう云ふやうな譯であるから英吉利は潛水艦を全廢して貰ひたい。さう云ふのが英吉利の主張である。ところが佛蘭西の言ふ所は

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

潜水艦と云ふものは弱者の自助の武器である。大艦は强者のオフェンシヴの武器である、潜水艦で以て弱者がオフェンシヴには出て行けない。是は一面の眞理であると思ひます、言換へれば他の國はキャピタル・シツプト云ふオフェンシヴの武器を持つて、居つて、佛蘭西だけ十七萬噸、極く僅かのオフェンシヴしか無いではないか、何か外に武器が無ければならぬ、潜水艦が無ければやつて行けないではないか、要するに潜水艦を使用すると云ふことは封鎖、――ブロッケードと同じことだ、又軍港がブロッケードされた時には其ブロッケードを破るべき唯一の武器は潜水艦より外ない、是は戰時中立派に證明されて居ります、併ながら英吉利の主張するには、然らば何故に御前の國と俺の國と同じものを持たなければならないか、御前の國は俺の國を壓迫する積だらう。俺の所は商船が澤山ある、御前の所は少いではないか、それならば現在の御前の國はプロバブルエネミーは獨逸より外は無い。一番初にブリアンが言つた如く、今後に於ける御前のサッポーズト・エネミー は獨逸でなければならぬ、獨逸に對して潜水艦を支持することは必要でないと云ふことを主張した、併ながら佛蘭西の言ふには俺の所が是だけ支持するのが不都合ならば、御前の國が是だけのキャピタル・シツプを持つのは不都合ではないか、先程私が言つたのと同じ理窟であります、俺の所が七割持つことが惡いならば御前の所が十割持つのも多いではないかと云ふのと同じことであります、要するに潜水艦は此五箇國だけが協定した所で他の國が澤山造らうと思へば造れるから何にもならない。他の國が澤山造つた時に英吉利は御前の國は造つてはならぬと言つて防止することが出來るか、是は各國のインテグリティーに係かる問題である。それだから潜水艦は單に五箇國だけが協定した所で何にもならぬではないか、だから此問題と云ふものは要するに五箇國以上の國が集まつて協定しなければならぬ、と云ふので到頭潜水艦問題と云ふものは流れてしまつた。さうして之を無意味に流してしまつてはならないと云ふので流しました後にルートの修正案が出て來ました、ルートは其當時兎に角潜水艦がオフェンシヴに有用な武器であるか、又デフェンシヴに有用な武器であるかと云ふことは別問題として、潜水艦が丁度歐洲大戰に於て行つた如き非人道に使はれるのは無謀な話だ、さう云ふ考を以てやられた日には堪まらないと云ふやうな考で以て、無防禦の船をアッタクトする、或は警告なしにアッタクトするのは海賊の行爲と認め處分すと。それだけ各國一致して決まつたが有名なルートの修正案、それだけしか潜水艦のことは決まらなかつたのであります。

それで先程申しましたトンネージと云ふことを色々歌つて居りましたか、要するにト

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

ンネージと云ふものは或ルールを作らなければならぬと云ふので、話があとに戻りますが、トンネージ・コムミッティーと云ふ特別委員會が出來まして、トンネージのデフィニションを決めたいと云ふので、是は特に造船家としまして私共のデューティーでありまして、是も色々研究をして見ました、御承知のアドミラル・テーラーが亞米利加からは此コムミッティーに出て來ますし、英吉利からは造船中佐でありますが、大使館の事務官を兼務てやつて居りますスタンタンと云ふ人が參りました、それから佛蘭西及び伊太利及日本からも相當な人が出て來ました、此トンネージ・コムミッティーで相當なトンネージを決めなければならぬと云ふ問題が起つて來たのであります、そこでトンネージを決めるにどう云ふことを考へなければならぬと云ふと、日本は石炭石油其他の燃料が非常に惡い國で、特に油の如きは碌々出ない、亞米利加の其當時主張して居つたのは、亞米利加は從來計畫排水量 total consumable materials の三分の二を取り計畫をして居るから、船のトンネージと云ふものにはコンシューマブル・マティーリヤルを何々パーセント艦型に應じて取るべしと言ひました即、さう云ふ或パーセンテーシを何々加へたものを以て各國のトンネージとするとに決めやうではないかと言ひましたが、ところが之には魂膽がある、亞米利加の三萬五千噸と云つて船のサイズを制限したのは巴奈馬運河の通船制限から出て來た事と自分は信じます。三萬五千噸以上の船は通る事は樂でない。現にニューメキシコが巴奈馬を通る時にさへ非常に困難を感じたのであります、さう云ふやうな所から三萬五千噸を歌つて居る、なかなか之には曰く因緣がある。ところが日本の狀況としては三萬五千噸に限られては何にもならぬと云ふ所から、フューエル其他は除いてしまつた方が宜い、言換へれば我々の主張する所はコンシューマブル・マティーリヤルはすつかり拔きにしてしまふ、船の本統の重量即ち船體、兵裝、防禦の總重量言換れば integral part 是だけを以てトンネージとする、是だけで決めやう、それでも我國は損をする、なぜなら惡い石炭を焚いて歩るかなければならぬ、それ丈けでも船體重量に一番初めからハンディキャップがある石炭はどうにも斯うにもならぬ、是だけは仕方が無いから、其上に持つて行つて石炭と油との數量の差及び航續距離の損失は避けたい、さうしてトンネージを決めやう、當時英吉利の主張して居つたのはさうでない、英吉利は三萬五千噸に限られるのは嫌やだ、所謂亞米利加の言ふ如き三萬五千噸は何にもならない、どうかして四萬噸近い船を造りたいと云ふので英吉利は主張して居ります、又伊太利は日本と同じやうな狀況で燃料に對して不自由がありました、そこで伊太利及び英吉利は我々の考へて居ることと同じやうな主張をしました、其結果トンネージと云ふものは彈丸と糧食は一パ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

イ積むが凡てフェーエル及びフィード・ウオーター、其他は全然抜きにしてしまふ、之を稱してスタンダード・トンネージと名付けました、之に對しては亞米利加は頑强に反對しました。テーラーの如きは最後まで頑强に反對しました、要するに是はトンネージのルールと云ふものを作るので、物の決め方で、メートルにするか、吋にするか、どつちが宜いかと云ふやうな問題である、之を五箇國の內四箇國が宜いと云へば一國だけ頑張る必要はない。是はポリシーの問題ではない。ルールの問題である、斯う云ふ見地から到頭亞米利加は此問題に對しては全然イールドしたのであります、それで三萬五千噸と云ふのは名ばかりで、骨抜きにして、實際はもつと大さな船にすると云ふことになりました、是は日本に取つては非常に利益のあることと自分は深く信じて居ります。

それで段々長くなりますから切詰めますが、次き來るのは航空母艦エイロープレーン・キャリーヤーの問題であります、是は御承知の通り大戰後初めて現れて來たものであります、今後航空母艦の效果は非常に多い、而も日本の如く家屋其他が木造で、且又都會が多く海岸に存在して居る、斯う云ふ國のデフェンスを造るのに其タウン・タウンに持つて行つて航空機のデフェンスを造るのには非常に金が掛かる、どうしても斯う云ふ國に於ては航空母艦を持たなければならぬ、デフェンスと云ふことに對して移動航空防禦物と云ふものを持たなければならない、伊太利の都市の多くも伊太利の海岸に置かれてある。然るに亞米利加の海岸は違ひます、御承知の通り桑港とサンヂゴー、それからメアー・アイランドの近所、太平洋には極く僅かしかございませぬ、それを越えて太西洋の海岸に行けば澤山ありますが、內地に至つては全然趣を異にしたる狀況であります、そこで日本では航空母艦と云ふものは少い數ではデフェンスすることが出來ない、又デフェンスするにはどうしても航空母艦と云ふものは亞米利加が言ふが如き少いアマウントではいけない、さうすると亞米利加は、そんなことを言つて日本は非常に澤山の飛行機を飛ばして來てカリフォルニアに爆彈を落すのだらう、さうしてカリフォルニアあたりを占領するのだらうと云ふやうなことを言つた者もありますが、さうでは無いで航空母艦と云ふものは實際都市が海岸に存在して居るやうな其國の狀況に依つて決めるべきものであるから、キャピタル・シップのレシオを以て決めるべきものでないと云ふことは明かであらうと思ひます、併ながら此問題は最後に決まりまして、大體に於て經費節減と云ふやうな考から、スクラップすべき船の或ものを航空母艦に直さうと云ふことで航空母艦のアマウントと云ふものは大體に於て決まりました、飛行機と云ふものは御承知の通り通商交通用の飛行機、即一般のシヴィル用の飛行機に澤山ボムブを持つて來て戰

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

爭になれば直ちに戰鬪用の飛行機に變りますが、此方は全然制限が出來ない、すれば出來ないことも無いけれども、制限することになると一般のシヴィイル・サーヴィースに使ふ航空機の發達を阻害することになる、と云ふ點から到頭出來ないことになりました。それから毒瓦斯の問題も色々にありましたが、時間もありませんから此邊のことは省略いたします。又實際造船家として重要なことは代船建造問題、それから如何にスクラップするかの問題、色々ありますが、是等は大勢に關係したことでありますから、ここに申上げることは省略いたしたいと思ひます。

それで先づ結論と致しまして、私の考へて居ることを極く簡單に申上げたいと思ひます。要するに此會議に依りまして、幾らなりと戰爭が起ると云ふやうな時期を段々延べたと云ふことは確でありますけれども、戰爭が起らない、戰爭が無くなると云ふことは全然保證の限りにあらず、全然出來ない問題である、然るにも拘らず我々の主張した如く色々の問題も起り、前にもちよつと述べたやうに纏つてやつて行かなければならぬと云ふことになると、將來に於てどうしても我々はリサーチー研究機關を盛に起さなくてはならぬさうして各國夫れ々々研究の歩を進めて各クォーリティーを良くして行かなければならぬ、而も日本に於ては特に此研究機關の必要を非常に强く認めるのであります、是は單に海軍の問題のみではありませぬ、先程から詳しく申上げました如く、國のデフェエンスの問題、國のウェルフェヤーの問題に對しては公私共にやつて行かなければならぬ是は前より必要であつたのでありますが、今後に於ては尙ほ必要になつて來たと云ふことは申すまでもないと思ひます、要するにクォーリティーの問題で、今までの日本人のやり方は外國崇拜又は眞似する主義と云ふものが非常に多かつた、それで少しばかり外國にも行つて來ますと其美點を眞似する許でなく、自分がオリヂネートしなければならないのにオリヂネートしない、クリエートしなければならないのにクリエートしない、今まで殆ど總てのものがマティーリヤルの文明、模倣的文明であつたと云ふことは申上げても宜いと思ひます。今後御互がどうしてもタレントを養成しなければならぬ、言換へれば經驗も必要である、併ながら又經驗は創造せずと云ふことも味うべき言葉である、言換へれば經驗に囚はれないで、外の人間より優つた頭腦を以てクリエートして行かなければならぬと云ふこと私が申上げるまでもなく、皆さん十分御氣の付いたことであらうと思つて居ります、さうして日本の如く石炭も碌々無ければ、鐵も碌々無く、さうして技倆も餘り進歩して居ない國が今後インダストリーのコムペティションに於て工業政策其他に對してどうしても外國に負けないやうにしなければならぬ、と云ふ

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

のは先程も申上げました如く日本が非常に澤山のハンディキャップを持つて居る。此ハンディキャップを少くするにはどうしてもインダストリーのエフィーシェンシイを上げなければならぬ、エンジニヤーとしての技倆、エンジニヤーとしてのタレントと云ふものが各國よりも遙かに優れて居らなければ、又其他總ての點に於て優れて居らなければ各國を凌駕することが出來ない。少くとも日本と云ふものを彼等のレヴェルまで上げることも到底出來ないのであります。是は今後我々がどうしても大いにやらなければならぬ所で、此點に付ては十分考へて戴かなければならぬと思ひます、エンジニヤーが唯利益を得ると云ふことでなく、國家としてどうしても少くとも彼等に一歩を讓らぬと云ふことに對しては御互に努力しなければならぬ、是だけの考は御互に十分に褌を締めて掛らなければならぬのであつて、單に三國干渉以後日本人が臥薪嘗膽したと云ふのでなく、それ以上臥薪嘗膽をまた多くの人がしなければならぬことであると思つて居ります、要するに此問題は亞米利加が亞米利加に非ずんば當然ミスチーフであるかの如く主張し所謂自分の主張して居ることが正しい、他人の主張して居ることは正しくない、自分達の主張は良い、御前達はミスチーフである、と考へるが如き事が往々見受けられました亞米利加に於ける多くの新聞紙を見ましても、バン・アメリカニズムの考に囚はれて居ります。そこで此バン・アメリカニズムの考はミリタイズム以上の世界のメネースにならなければならぬ、言換へれば是だけの土地を持ち是だけの富を持つて居る亞米利加が世界を支配すると云ふが如き意思でもあるなれは、此意思があると云ふことが既にミリタリズム以上の世界のメネースである。斯う私は信ずるのであります、從來亞米利加に對する日本の態度と云ふものは丁度貧乏人であるから俺は是だけで澤山だ、彼は金持の息子であるから喧嘩をしたら損だ、極端な平和論者の考は皆さうである。金持の息子だから貧乏人の息子は成るべく喧嘩しない方が宜い、成るべくおとなしくした方が宜いと云ふので、金持の息子の爲に貧乏人の息子が益押付けられたのが現在までの日本の狀態であると思ひます。今後果して多くの平和論者が言ふ如く日本と云ふものは亞米利加に對し永久に戰爭しない。鐵砲を拵へてもそれは單に用意に過ぎない、正宗の寶刀も單に用意に過ぎないと云ふ樣にさせようと云ふ。それは亞米利加人をして彼等の考へて居るバンアメリカニズムと云ふものは誤である。彼等の考へて居るバンアメリカニズムと云ふものは世界のメネースであると云ふことを自覺させなければならない、是が實際亞米利加がユナイテッド・ステーツとして立派な文明を造り、世界人類の爲に貢献する所以であらうと思ひます。要するに今までの如く片一方を抑へて片方を揚げると云ふことでな

NII-Electronic Library Service

The Society of Naval Architects of Japan

く、軈てどうかして彼等をして理解せしめると云ふことに努力しなければ日米の親善は保たれないことであらうと、自分は僅かばかりの滯米でありましたが、つくづく感じたのであります。

長い間御靜聽を煩はしました。

○會長(近藤基樹君)　唯今の御講演は豫て我々が知りたいと思つて居りました所を精細に御説明下さいまして非常に利益を得ましたことを深く感謝する次第であります。併ながら問題が問題でありますから、別段討論と云ふこともあるべき性質のものでないと思ひます、皆さんと共に例の通り拍手を以て感謝の意を表したいと思ひます(一同拍手)

NII-Electronic Library Service